

第6回 家活グランプリ・講評

審査委員長 北川 太一（摂南大学 教授）

総評

JAの教育文化活動は、「家の光三誌」を積極的に活用しながら本店や支店での協同活動を展開することによって、JA、組合員、地域とのつながりをつくり、JAの事業や組織の根を広げていくことをめざしています。第6回目を数える家活グランプリですが、今回もコロナ禍の中でさまざまな制約があるにもかかわらず、前向きな姿勢で創意工夫し、仲間と協力しながら取り組む実践事例が多く寄せられました。4人の審査委員により、①組織・地域の特性を踏まえて、創意工夫して「家の光三誌」の記事を活用しているか、②教育文化活動や記事活用の効果と広がりがみられるか、③豊かな表現力で活動内容が表されているか、を審査基準として、書類選考を通過した12の作品にたいする審査がおこなわれました。いずれも甲乙つけがたい僅差の内容でしたが、厳正な審査の結果、各賞を決定しました。これらの実践事例に学びながら、家活の輪がますます大きくなっていくことを期待しています。

<最優秀賞>

立ち止まりたくない！ 新たな挑戦は『家の光』とともに

神奈川県JAあつぎ 齋藤美穂さん

「コロナを理由に立ち止まってはいけない！家活を通して少しでも歩みを再開しなければ！」こうした強い思いを原動力にして、創意工夫溢れる活動の様子が表現されています。お家時間を楽しめる企画で悩んでいたところ、『家の光』2018年9月号の別冊付録「いきいき『脳トレ』BOOK」が目にとまり、それを活用して定期回覧で配布。回答者には、一方通行にならないように手書きで返信し、そこに『家の光』掲載のクロスワードパズルを記載するなど、『家の光』を何度も読み返してもらえる仕掛けが施されています。『家の光』を少しでも楽しんでもらえるように、生活指導員の仲間と知恵を出し合って「家の光クイズ大会」を実施。回答と同時に記入してもらったアンケートから、『家の光』の愛読ポイントや家活に関する多くのヒントを知ることができたそうです。活動にプラスαのちょっとした工夫をすることで、『家の光』の購読と、活動の輪が広がっていくことを教えてください。

<優秀賞>

家活から繋がっていく仲間づくり

愛知県 JA あいち中央 坂田由里子さん

「組合員との対話を大切にする！」それが、一人ひとりの生活に関わる思いや願いを JA の事業に結びつけるのではないか。そのためには、地域に住む子育て世代の女性への情報発信（＝対話）が重要ではないか。こうした強い思いをもって、さまざまな家活に取り組んでおられます。とくに、JA として取り組む「フレミズの森」は、各地区で創意溢れる活動が展開されていますが、安城北部ブロックでは、「焼かない夏のケーキ」作りをはじめ『家の光』を活用した食に関する企画を行った結果、食の安全・安心への意識を高めて産直事業の利用につながる兆しを見せ、「フレミズの森」の新会員獲得や『家の光』普及部数の増加に繋がっています。目標を明確にし、対話を重視しながら活動をすすめていくことが、着実な成果に結びつくことを説得力ある文章で表現されています。

「家の光ディスプレイコンテスト」に参加して

福井県 JA 福井県 笹原久美子さん

「家の光ディスプレイコンテスト」の回覧文書を見るやいなや、「やらせてください！」と手を挙げた笹原さん。准組合員や地域の人たちの来店が多い支店の特徴を考慮し、信用・共済窓口担当者として勤務した経験も活かしながら、「推し」、「ハッシュタグ」の文字を使った「応援うちわ」を飾り、JA バンクの Mascot の力も借りながら、『家の光』や「家の光家計簿」を複合的にアピール。その結果、支店に来る人たちの間で『家の光』記事の話題で会話が弾み、支店職員の興味・関心も高まるなど、単に見本誌を置くだけでは得られない効果があったそうです。信用・共済・営農・生活を含む総合事業の中で『家の光』を“見える化”することで、JA のさまざまな事業へと波及していく様子が、生き生きとした文章で綴られています。

<佳作>

『家の光』は私の道しるべ

山梨県 JA 南アルプス市 五味広子さん

初めて就いた生活指導課の慣れない業務の中で、計画・準備した女性大学での講師の招へいがコロナ禍のため中止に。それでも「開催しましょう」と女性部の役員にも後押しされ、五味さんも「わたしがやるしかない！」と覚悟を決めて、『家の光』を頼りに、パタカラ声の運動、ごぼう体操などを実演を交えて自ら講演。その結果、多くの参加者の興味・関心を引き起こしました。その後も、「食品ロスを減らすワザ」を題材にフードドライブを呼びかけたところ、女性部の新しい活動としてスタート。コロナ禍で活動ができず解散寸前だった手芸部も、自ら企画した「新聞紙エコバッグ作り教室」を開催し、解散するどころか女性部員の加入へと繋がりました。最初は逡巡していた気持ちが、ワクワクして活動に取り組むように変化する様子が伝わってきます。

“在宅家活”で気づいた家の光の良さ

静岡県 JA しみず 萩原靖子さん

本部の担当者として『家の光』を普及する役割を持つ萩原さん。「女性部活動で活用されていない」、「『家の光』の良さが共有されていない」ことを実感。そこで、コロナ禍でも、女性部員が自宅でも取り組める『家の光』を使った「在宅家活」を提案。「あなたとわたしのハッピーアワー」内の「川柳道場」のコーナーや「つながるひろがる 絵手紙のわ」への投稿、手芸の記事を活用して自宅で作り、それを展示や回覧で見てもらえるようにしました。「川柳道場」のお題を使った川柳大会は、女性部員だけではなく、職員や地域の人たちにまで広がり、これがきっかけとなって多くの人たちが共通の話題で繋がり、みんなの「心の距離」が近くなったそうです。2年間の在宅家活により『家の光』をめくる回数が増え、そのよさも実感。地道な活動が、『家の光』の普及にも繋がるのが伝わる作品です。

それぞれの個性が光る活動を！！

愛知県 JA あいち中央 岩井ゆかりさん

コロナ禍のため、去年は一度も活動ができなかった組織がある中で、「例年通りやってもダメ！このままでは衰弱の一途をたどってしまう！」と危機感を持った岩井さん。コロナ禍でも楽しくできるように『家の光』を活用したハンドメイドの活動を行いました。担当職員が前面に出すぎないように、材料を揃えておいて自分の好きな物を作ってもらい「バイキングスタイル」を取り入れると、参加者同士で会話が生まれ、仲間づくりがすすんだそうです。自由なスタイルが自発性を生み、楽しく明るい雰囲気を生み出す。その中で『家の光』未購読者に個々に声かけをするのが普及や仲間づくりのコツ。協同活動をすすめていくうえで、とても示唆に富んだ内容です。

以上